ヨブ記の詩における実存理解

茂　洋

序
一、ヨブの歎き訴え（三章の解釈）
二、歎き訴えの拡大（四―二七章の解釈）
a. 三つの歎き訴えの拡大
b. 三人の友人の立場
c. 神への願望と告訴
三、神への告訴（二九―三一章の解釈）
四、主との会話（三八―四二章の解釈）
結　語

序

ヨブ記には思索の問題がのべられているのではなく、実存の問題がとかれている。人間存在の客観的記述ではなく、具体的に歴史に住みその制限をになった一人物ヨブの現実がのべられている。

ヨブ記の詩[*1]の構造は、実存者ヨブの独白と二種類の対話とから成立している。[*2] 前者は三及二九――三一章を指し、後者はヨブと友人間の論争（四――二七章）と主のヨブとの対話（三八――四二章）である。[*3]

従って、ヨブの実存理解に際しても、三章の独白における歎き訴え、友人との論争における歎き訴えの拡大、さらにヨブの結論的独白における神への告訴、最後に神の前にたつ信仰者の姿を通して、理解されるべきである。これら

を通して神の前にたつ人間の状況に一つの光をあててみることにする。

*1 散文と詩文とは、それぞれ書かれた時代、場所および目的が異なっている。詩人がすでに存在していた散文による物語を序文およびエピローグとして用いたものと考えられる。

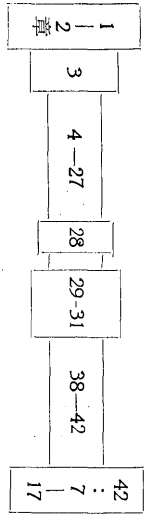
Cf. W.B. Stevenson, *The Poem of Job* (Aberdeen: The Aberdeen University Press, 1951); Gustav Hölscher, *Das Buch Hiob* (HZAT) (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1952); Artur Weiser, *Das Buch Hiob* (ATD) (Göttingen: Vandenhoeck & Kuprecht, 1959).

*2 二八章は、知恵讃美の詩であるが、著者は不詳。三二—三七章のエリフとヨブとの対話も、後期の作品であろう。

Cf. Claus Westermann, *Der Aufbau des Buches Hiob* (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1956); Samuel Terrien, "The Book of Job," *The Interpreter's Bible*, Vol. III (New York: Abingdon Press, 1954).

*3 ウェスターマンによるヨブ記の構造及び対話の形式は、次の表に示される。 C. Westermann, *op. cit.*, pp. 5f.

友人 ⇄ ヨブ ⇄ 神



一、ヨブの歎き訴え（三章の解釈）

ヨブ独白の前提になっているのは、当然散文に示された逆境のヨブである。自己自身に対してまた環境に対して「正しく」、さらに神に対しては「神を恐れ、悪に遠ざかり」（一・一）、さらにむすこたちの罪の可能性を考え「彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた」（一・五）ヨブが、「すべての所有物」——その財産、むすこたち——

を失い、さらに自己自身の身体は「いやな腫物」でなやまされる不幸がおとづれた。この段階において、「われわれは、神から幸をうけるのだから、災をもうけるべきではないか」（二・一〇）と彼は叫び、くちびるで罪をおかさなかった。「ヨブは、これらの苦難を神の意志の表現として受取った[*4]」。ここにヨブにとっては逆境が神への義と出会い、神への義が勝った姿[*5]が示されている。

しかし詩に入ると、ただ単に「何故正しい者が苦しむのか」といった簡単な問題ではなく、すべての実存 existence[*6] がになっている窮境 predicament[*7] の問題があらわされる。人間存在それ自体のになっている窮境がここに示される。これは、すでに浅瀬の問題ではなく、「深き淵より」（詩篇一三〇・一）の問題である。実にヨブ記の詩人は、教えを書いているのではなく、歎き訴えを書いている。この詩にあらわされているのは、人間の深き実存的告白である。一切は、すべての人間存在が「窮境の下[*8]」にあることから出発している。

＊　＊　＊

さて三章に眼をむけると、まずヨブの実存的告白としての歎き訴えが示されている。しかしそれは、単に三章のみにとどまらず、ヨブ記の詩全体に流れる三種の歎き訴え Klage が含蓄されている。

まず第一に「わたしの生れた日は滅びうせよ」（三・三）と、自己の誕生日を呪うことが示しているような他者に対する歎き訴え Feindklage が記されている（三・三―九）。その根拠は、「わたしの母の胎の戸を閉じず、また悩みをわたしの目に隠さなかったからである」（三・一〇）。自己をとりまくこの他者に対する歎き訴えは、友人との論争において、友人にそのほこさきがむけられることによって一層拡大される。

第二の歎き訴えは、この章で特に中心的な自己に対する歎き訴え Ich-Klage, Sich-Beklagen である。三・一一に「なにゆえ、わたしは胎から出て、死ななかったか」と歎き、「なにゆえ、わたしは……」warum-ich の疑問を

発している。自己の存在自体に対する歎きに他ならない。

第三は、神に対する告訴 Anklage Gottes である。「なにゆえ、悩む者に光を賜い、心の苦しむ者に命を賜わったのか」（三・二〇）の問いに示されているように、「なにゆえ彼は……」warum-er という疑問で始まり、この訴えのほこさきは、最後に神へと向けられている。つぎにつづく論争中にさらにこの点が明確化される。

以上のべたように、ヨブ記の詩にあらわされた歎き訴えは、三章にあらわされた神に対する告訴、自己に対する歎き訴えと他者に対する歎き訴えという三つの内容[*9]を有する。これらの歎き訴えが論争を通して、お互いにいりまじり、発展拡大し、結論へと導かれている。ここにヨブという一人物がになっている実存的状況が示されている。

*4 S. Terrien, *op. cit.*, p. 898.

*5 Cf. *loc. cit.*

*6 実存とは、実在の本質的構造が引き裂かれ歪められており、可能性の状態と訣別している状況である。テイリッヒ「文化と宗教」（東京・岩波書店・一九六二）参照。

*7 窮境は、本質的な諸要素が、実存的な諸要素と結びつけられてあるという不安と、神からの離反との状態をいう。前掲書参照。

*8 Paul Tillich, *Systematic Theology*, Vol. II (Chicago: The University of Chicago Press, 1957) p. 26.

*9 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, pp. 25ff.

二、歎き訴えの拡大（四―二七章の解釈）

ヨブの歎き訴えは、正統派神学の持ち主である三人の友人の登場にもかかわらず、さらに拡大し、彼等との論争を通して、ヨブの実存のもつ窮境の深さがあらわされた。

a. 三つの歎き訴えの拡大

三章に提示された三つの歎き訴えは、友人との論争を通して、さらに尖鋭化し復合化し深刻化された。[*10]

まずヨブの他者への歎き訴えは、当然三人の友人にむけられている。たとえばヨブは、「まことに、わたしのうちに助けはなく、救われる望みは、わたしから追いやられた」（六・一三）と語り、宗教のいかなる客観的真理も、苦悩をになう実存に救いを与えるものではないことを示している。ヨブにとって、友人達は、ヨブ自身の実存にふりかかる「災難を見て恐れた」（六・二一）のである。

論争を通して、実存者の三友人に対する歎き訴えは、さらに人間全体に対する歎き訴えと進む。「わたしを知る人々は全くわたしに疎遠になった。わたしの親類および新しい友はわたしを見捨て、わたしの家に宿る者は、わたしを忘れ、わたしのはしためらはわたしを他人のように思い、わたしは彼らの目には他国人となった」（一九・一三c―一五）。いかに親しい友人や家族であっても、その人間存在の窮境に真の救いを与えるものではない。たとえそれが最高の宗教的人物であるにしても、その人物が有限なるものである以上、人間の存在の窮境に光を与え得るものではない。問題の核心は、その実存者の魂の深部がかかわるものであり、他のいかなるものであるにせよそれが有限である以上、そこには真の救いを与えることは不可能である。

歎き訴えの第二としての自己への歎き訴えは、論争の当初においてきわめて強かったが、[*11] 他者に対する歎き訴え、さらに神に対する告訴が優位をしめ、論争の後半には自己への歎き訴えは影をひそめている。しかし歎き訴えの結論としての三〇章に至り、終局的な歎きとして自己への歎き訴えが示されている（三〇・二四―三一）。ゆえにヨブの実存のもつ歎き訴えは、本質的には自己に対する歎き訴えなのである。真実に究極的なものとの関わりをもつまでは、ヨブは「実存的失望」――「人間の実存そのもののうちにまで達する失望」[*12] におおわれざるを得なかった。

既に第三章でみたように、ヨブの自己への歎き訴えは神への告訴へとむけられた。ヨブの最初の回答によると、「それゆえ、わたしはわが口をおさえず、わたしの霊のもだえによって語り、わたしの魂の苦しさによって嘆く」（七・一一）という神への歎き訴えが、歎きの本来の姿となって示されている。故に神への告訴は、ヨブ記における歎き訴えの核心である。しかしこの神への告訴は二つの性格をもつ。神への供述 Aussage と自己の存在の意味への訊問 Frage がそれである。[*13] 七・一二―一六が前者を示し、七・一七―二一が後者を示す。即ち、神に対して、「わたしは命をいとう。わたしは長く生きることを望まない」（七・一六）と供述したヨブは、自己の存在の意味を問い「いつまで、あなたはわたしに目を離さず、つばをのむまも、わたしを捨てておかれないのか」（七・一九）と語っている。

また他者に対する歎き訴えの形式における神への告訴が、一九・七―一二にあらわされ、神が敵（他者）となったという告白へヨブは導かれている。「（主は）わたしに向かって怒りを燃やし、わたしを敵のひとりのように思われた」（一九・一一）、「わが友よ、わたしをあわれめ、わたしをあわれめ、神のみ手がわたしを打ったからである」（一九・二一）。

以上のべた如く、神への告訴が直接的なヨブの結論的歎きとなった（三〇・一八―二三）。しかし神はヨブに一切答えていない。ここに究極的交りをもたない人間の実存の限界が示されている。

*10 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, pp. 39f.

*11 Cf. *Ibid.*, p. 55.

*12 Paul Tillich, *Dynamics of Faith* (London: George Allen & Unwin Ltd, 1957), p. 12.

*13 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, p. 47.

b. 三人の友人の立場

ヨブの実存的苦悩に対して、エリパズ、ビルダデ、ゾパルの三人が、それぞれ慰めの言葉を発する。かれらによれ

ば、人間存在のもつ苦悩は、神の罪人に対する報いであり、ヨブがその苦悩を歎くことは、彼の信仰の不従順によると解釈されている。

三人の中で、最年長で最も教養のあるエリパズは、第一回目の議論（四・一―五・二七）において、神の絶対性をのべ、人間の苦悩は神に対する強慢な態度の結果だと論じている。人間は自ら苦難を招くという考え[*14]である。ビルダデの論旨（八・一―二二）も前者のそれと変らないが、その語調はきわめて激しく衝動的である。エリパズはなおヨブへの同情をもっていたが、ビルダデにはそれがなく、神人関係は一切道徳的に解釈され、人間の不幸は罪の結果であると決定づけている。とくにヨブの子供たちの死が、かれらの罪の結果であると理解している点によくあらわされている（八・四）。ゾパルの立場に目をむけると、この最年少者の友人の論旨（一一・一―二〇）は、最も鋭くかつ冷酷である。神は人間のいかなる知恵よりも偉大であり、人間によっては規定されない存在であるというのが彼の立場である。[*15] しかし彼によれば、結局道徳的行為によらなければ、救いをうることは出来ない。

第二回目の議論は、第一回目より、友人達の立場と自己矛盾になやむヨブとの立場の差が大きくなっている。友人達の議論の語調は一層激しくなっているが、その内容は一歩も進展せず、伝統的な宗教的教理――因果応報的神学――の解説をしているにすぎない。まずエリパズは、神の真理を自己の属する正統派神学と一致させ、自ら神を慰めるものと自認し、ヨブの無罪の主張こそ神への反逆者であるときめつけている（一五・一―三五）。ビルダデも、やはり伝統的立場をとり、普遍的な教えには決して例外のないことを主張し、ヨブの叫びを異端者の叫びと呼んでいる（一八・一―二一）。このビルダデも神を人間的倫理主義をもって規定しているにすぎない。ゾパルの立場も他の二人の友人のそれと同じで、悪人は決してさかえることがなく、滅亡は時間の問題にすぎないと論じ、伝統的因果応報説の形式的な適用をしたにすぎぬ（二〇・一―二九）。

第三回目の議論（二二・一―二七・二三）になると、友人たちの態度は、一切の礼儀を欠いた激しい口調となり、彼

らの最初の伝統的教理さえもしばしば無視されるに至った。神秘家としてのエリパズ、伝統論者としてのビルダデ、粗野な独断論者としてのゾパルの三者の共通点は、まず罪のないところには罰はなく、第二に何人といえども罪のないものはなく、第三にヨブの苦悩は罪に対する罰であり、彼は悔い改めて神のゆるしをまつべきであるという三点[16]である。結局彼らによれば、信仰は倫理に化しているのである。

人間存存全体が究極的なもの、無限なるものと関与することにおいて、はじめて信仰が可能なのである。[17]ゆえに有限なるものが、たとえそれが如何に偉大な宗教的結論であろうとも、無限なるものの代行をすることは不可能である。もしそれをあえてすれば、三友人がおかした誤りの如く、信仰の深奥さは、倫理という簡単な道理にすりかえられてしまうのである。

＊　＊　＊

次に三友人の神学的矛盾を指摘しよう。かれらは、それぞれ神と人との間の差を示した点は正しい（四・一七―二一、一五・一五、二五・四―六）。しかしかれらが、人の正しいときに全能者のよろこびがないというのはあやまりである（二二・二―三）。またかれらは、ヨブが人間のもつ限界をうけ入れぬところに罪があることを主張している点は正しい（一五・七―八a）。しかしヨブの実存的苦悩がかれのむすこたちの罪の結果とか、ヨブ自身の倫理的罪の結果としていることはまちがいである（八・四、一一・一四、一五・一五、一八・二一、二二・五ff）。またかれらがヨブに謙虚な思いをもって神を求めるよう勧告したことは正しいが（五・八、八、八・五、一一・一三、二一・二一―二二）、しかし機械的な因果応報の教理を支持していることはまちがいである[18]（五・一七―二七、八・六―二二、一一・一五―二〇、一五・一七―三五、一八・五―二一、二七・一三―二三）。

結局三人の友人達はヨブと同じあやまりを犯している。つまりかれらは、すくいの道徳的な側面だけで満足する結

果となり、自己の意志によって自己の運命の作者となりうると信じるに至った。ここにはヨブの歎きと同様に、神人関係において神のめぐみの場も、神の愛の必要性もない。かれらにとっては、宗教は、取引きに化している。謙遜とか道徳とかいうすぐれた教理をかれらはもっている。しかしかれらの信念は信仰とはかなりかけはなれたものとなった。

*14 Cf. S. Terrien, *op. cit.*, p. 932.

*15 Cf. *Ibid.*, p. 992.

*16 Cf. *Ibid.*, pp. 899f.

*17 Cf. P. Tillich, *Systematic Theology*, Vol. II pp. 19f.

*18 Cf. S. Terrien, *op. cit.*, pp. 899f.

c. 神への願望と告訴

ヨブの苦悩は、単に肉体的物質的社会的な苦しみにとどまらず、ヨブ自身が神から疎外されているところに根本的な源がある。このため、ヨブは神から疎外されているという苦悩をにないつつ、なお義なる神、全能の神を信じようとしている。故に、ここに神を否定する時と肯定する時とが入りまじり、神への反発と信頼、闘争と希望、告訴と願望とが共存している。*19

ヨブの神への願望は、明らかに神への告訴へとむけられている。まずヨブの神への願望の第一歩は、自己の死を願うことである（三・一一―一三、二一―二、六・八―一〇、七・一五）。しかしこの願いは、序々に消えていっている。

第二の神への願望は、神が自己よりはなれて欲しいということである。「わたしに構わないでください。わたしの日は息にすぎないのだから」（七・一六bその他一〇・二〇b、一四・六、一三―一五）。この段階において、神へ

の願望と対抗とが入りまじっている。つまり、神が自己からはなれることを願いつつ、かれは神と論ずることを望み（九・三四―三五）、神の回答を求めている（一三・二一―二二）。

第三の神への願望は、ヨブの告訴を聞き、かれの死の弁護の出来る証人を得ることである。[20]「見よ、今でもわたしの証人は天にある。……どうか彼が人のために神と弁論し、人とその友との間をさばいてくれるように」（一六・一八―二二その他一七・三、一九・二三―二四）。ここに神への願望と対抗とが、期待とむすびついている。

第四は、神との出合いを求める願望である。「どうか、彼を尋ねてどこで会えるかを知り、そのみ座に至ることができるように」（二三・三）。ここにあらわされたヨブの願望は、全体の構成の背景となっている。さらにこの願望は、神への告訴へと結論づけられている[21]（三一・三五―三七）。

＊　＊　＊

ヨブの待望していた神は何であったのだろう。それは、真の意味での神ではない。ヨブ自身の願いに応えてくれる神が求められている。「ヨブの神に対する態度は、被造者の創造者に対する態度ではない。それは、神の意志という名を用いて自己の無罪を証明しようとしたに他ならない」[22]。ゆえに、自己の正しさと自己のもつ実存的苦悩とを和解せしめることが出来なくなったとき、神への告訴をなし、さばきの座にあってなお強く自己主張をする人間となった。この意味で、「信仰は、人間を中心とし神を人間の必要、興味、安全および自己の価値評価などの僕とするような人間中心的な関係ではない」[23]のである。神はあく迄神であり、人間はつねにその僕（しもべ）なのである。ヨブはこの点で誤謬をおかしている。

ヨブの神への願望の根底にあったのは、結局自己の無罪の主張と、神の不当な取扱いに関する告訴である。ここに全く神のめぐみの場を必要としないヨブの姿が示されている。「彼は、助け求めるよりは、自己自身でありたかっ

た」（キルケゴール）。ヨブは、自己の価値を認めてもらいたかった。しかしその時こそ彼自身神のめぐみを必要としない時となっている。ここに真の意味で無限者との交りをもたない有限者の窮境が示されている。

*19 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, pp. 55ff., S. Terrien, *op. cit.*, pp. 900f.

*20 Cf. *Ibid.*, p. 901.; 浅野順一「ヨブ記の研究」（東京・創文社・一九六二）九八頁以下参照。

*21 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, p. 58.

*22 S. Terrien, *op. cit.*, p. 901.

*23 Gustaf Aulen, *The Faith of the Christian Church*, Tr. by Eric H. Wahlstrom & C. Everett Arden, (Philadelphia: The Muhlenberg Press, 1948), p.24.

三、神への告訴（二九—三一章の解釈）

三友人との論争を経て、ヨブは歎き訴えの結論に至る。先ずヨブは自己の過去の幸福を回顧し（二九章）、それを現在の悲劇と対照し（三〇章）、最後に強い無罪の主張をしている[*24]（三一章）。とくに無罪の主張がこの結論の部分の主題である。詩篇五、七、十七、二六篇にも同様に無罪の主張が示されている。ヨブは、「わたしは苦しい日を送る者のために泣かなかったか。わたしの魂は貧しい人のために悲しまなかったか」（三〇・二五）と歎きつつ、自己の無罪の事実を証ししようとしている。

先ず二九章をみると、ヨブは過去の幸福を回顧し、正義の受肉者の如き存在であることを自任している。「ああ過ぎた年月のようであったらよいのだが……」（二a）と神への願望がのべられ、つづいて「わたしの盛んな時のようであったならよいのだが。あの時には、神の親しみがわたしの天幕の上にあった」（四）と神に対して歎き訴え、自己に対しては、「あの時には全能者がなおわたしと共にいまし」（五bその他一二—二〇）たと歎き、さらに彼に尊

敬の念を持っていた他者に対する歎き訴え（七―一一、二一―二五）が示されている。この様に二九章にすでに三種の歎き訴えがあきらかに結合され示されている。

三〇章では、現在の悲劇が過去の幸福と対比してのべられている。一、九、一六節の冒頭にはそれぞれ「しかし今は」[*25]という語がおかれ、現在の苦痛を示し、二四節には「たしかに」[*26]という語で自己の存在の苦痛を記している。まず「年若い者」からあざわらわれ「浮浪人」からいやしめられていること（一―一五）が示しているように他者に対する歎きがのべられ、つぎにヨブ自身の肉体的苦痛への歎き（一六―一九、二四―三一）がつづき、最後に「わたしがあなたにむかって呼ばわっても、あなたは答えられない。わたしが立っていても、あなたは顧みられない」（二〇その他二一―二三）と神への告訴がのべられている。三章において自己の歎き訴えが神への告訴となっていたように、三〇章でも同様にえがかれている。ヨブにとって、応答されない神は「無情な者」なのである。

最後の無罪の主張、自己弁護が三一章に示される。「もし」[*27]ではじまる一六の仮定文をもって自己弁護と時には自己呪詛とがなされた後、いままでの種々の歎き訴えが結論づけられている（三一・三五―三七）[*28]。「ああわたしに聞いてくれる者があればよいのだが。ああわたしの敵の書いた告訴状があればよいのだが。」（三一・三五）という言葉は、単なるねがいではなく、神の前のヨブがもつ一切の歎き訴えと自己義認の主張である。このヨブの願いは聞かれない。だが、これは実存の限界状況にたつヨブの精一杯の叫びである。この箇所において、種々の歎き訴えが、さまざまの詩の構造上の変化あるいは人間の心理のうごきを経て、結論づけられ、ヨブの主張の一切が完了した。しかもこの結論が、三八章以下にはじまる主との会話と印象深い対比をなしている。[*29]

*24 Cf. S.Terrien, *op. cit.*, pp. 1106ff.; C. Westermann, *op. cit.* pp. 33ff.,; S.R. Driver & G.B. Gray, *The Book of Job* (ICC) (Edinburgh: T. & T. Clark, 1921) pp. 245ff.

*25 'attûh (*Biblica Hebraica, ed.* R. Kittel)（現在の状況において）「今は」（過去に起った事件後）「今は」Koehler-

Baumgartner, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros* (Leiden: E.J. Brill, 1958), p.747a.

*26 'ak（強調の副詞として）「ただ」*Ibid.*, p. 42b.

*27 五、七、九、一三、一六、一九、二〇、二一、二四、二五、二六、二九、三一、三三、三八、三九節。

*28 Cf. C. Westermann, *op. cit.*, p. 39.

*29 Cf. G. Hölscher, *op. cit.*, p 73.

四、主との会話（三八—四二章の解釈）

主とヨブとの会話は、今までのヨブと友人との論争とは異なった次元の内容をもつ。友人との論争では、神とか絶対者とか表現されているにもかかわらず、それは人間存在の究極的な関与の対象としてではなく、有限なるものが究極的なるものの代行をしたに過ぎない。そこには実存者ヨブのもつ窮境に、真の救いは見出せない。さらにヨブ自身も、自己の義を主張することにより一層神との間のみぞの深さを体験した。自己の義を主張する人間が、怒る神とはげしく対立する姿が極限にまで達した。ここにヨブの最後の神への挑戦「どうか全能者がわたしに答えられるように」という言葉が発せられた。

しかし主の応答はヨブの期待とは全く異なっている。主のヨブへの言葉は、「自己を是とし、神を非とするのか」というするどいものである。ヨブはおそれと畏敬とをもって、神がすべての伝統や理想や人間の知恵の上に立ちたもうことを知った。ここに真の恩寵がある。ヨブの正しさが認められたのではなく、究極者と究極的に交わることの必要が示されたのである。「主よ、我々の心は汝の衷に休息を見出すまでは安きを得ない。」（アウグスチヌス）のである。恩寵は、人間の行為の故に because 示されるものではなく、人間の無価値にもかかわらず in spite of[*30] 与えられるものである。信仰は人間の業ではなく、神の賜物である。[*31]

三八章以下に示された主とヨブとの対話は、主のヨブへの回答ではなく、主が彼に語りたもうことそのこと自体に意味がある。つまり主が語りたもうということ自体が、実存者ヨブへの真の救いなのである。かかるヨブの主との出会いこそ、真実の神との交りなのである。「神の語りかけ自体が、神の愛であり受肉なのである」[*32]。ヨブはこの神の語りかけへの応答のみがゆるされるのである。「わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（四二・五f.）。

主の語りかけの内容は、一切の創造者なる神の偉大さを表わしている。主が創造者であること（三八・四―三九・三〇）と、歴史の支配者なる主であること（四〇・六―一三）とが示されている[*33]。信仰の関与する事柄は、相対的な存在によって理解し尽されるものではなく、相対的な存在ではつかみ得ないところの無制約的なもの、絶対的なもの、永遠なるものなのである。

したがって、これらの主の語りかけに対するヨブの回答は、きわめて端的なものである。窮境下にある実存の真の救いは、絶対なるものとの交わりにおいてはじめて可能となる。ヨブの全存在が神と究極的に関与したとき、ヨブに真の救いが与えられたのである。ここに示されているヨブの姿こそ、「究極的な関わりの対象への全的献身[*34]」の姿である。

*30 Paul Tillich, *The New Being* (New York: Charles Scribner's Sons, 1955), ch. VI.

*31 Cf. S. Terrien, *op. cit.*, p. 902.

*32 C. Westermann, *op. cit.*, p. 92.

*33 *Ibid.*, pp.88f.

*34 P. Tillich, *Dynamics of Faith*, p 2.

結　語

ヨブ記の詩にあらわれた信仰を省察して、真実の信仰は、人生にある種の苦難がふりかかったときにそれをのりこえるためにあるのでもなければ、外形上信仰的に見える事柄によって自動的に与えられるものでもなく、人間存在の最深部の関与する事柄である。信仰は、人間存在それ自体がもつ実存的姿から出発する。貧富、老若、男女の如何を問わず、形式的信仰の有無を問わず、すべて人間の実存が、窮境下にあることから出発する。この窮境下にある人間の実存――ヨブ記の詩ではそのしるしが歎き訴えとして示されている――からの解放が信仰である。しかも有限者の苦悩が有限なるものによってはいやされない。有限者の苦悩からの真のいやし、即ち窮境下の実存からの真の解放は、永遠者との出会いによってはじめて具体化される。ここに真実の信仰のめぐみがあり、よろこびがある。ヨブが詩の結論において得たことは、永遠者との究極的なる交わりの無限のめぐみに他ならない。

Shigeru, Hiroshi

The Understanding of Existence in the Poem of Job

Rèsumé

The poet in the book of Job resolutely faced the dark riddle of existence, looked beyond the wisdom of men, and sought the wisdom of God. The existence of the individual is filled with anxiety and threatened by meaninglessness. All human beings exist under the predicament. The answers to the questions implied in man's predicament are religious, whether open or hidden.

In the poem of Job man's predicament is described in three types of accusation. 1) Accusation of others: Job accused the day on which his mother gave him birth (Job 3:3–9) and, later, his three friends. 2) Accusation (lamentation) of self: he lamented himself and inquired painfully "Why died I not from the womb?" (3:11). 3) Accusation of God: Job spoke in bitter question and in the name of any man who "is in misery, whose way is hid, and whom God hath hedged in" (3:20–23). At last the Deity was remembered, but only as the author of evil.

The three types of accusation are enlarged, intermingled and deepened through three discussions between Job and his three friends (chs. 4–27). At his peroration (chs. 29–31) he does not believe in God, but in his own conception of God. He aspires to meet God, but on his own terms, in order to have his integrity vindicated. At the very end of his final oath of innocence he made the ultimate challenge to God, saying "Oh, that I had one to hear me! ... Oh, that I had the indictment written by my adversary!" (31:35).

Existential disappointment, a disappointment which penetrates into the very existence of man, is not recovered until he finds the demand of total surrender to the subject of ultimate concern.

Here Job hears a voice from the whirlwind (38:1-42:6). It is not the answer of God to Job, but the Word of God to him. The Word of God is the divine revelation and Love. Therefore, he recognizes the omnipotence of God and at the same time discerns that divine will is neither arbitrary nor whimsical but follows a considered and deliberate purpose. He confesses "Therefore I have uttered what I did not understand, things too wonderful for me, which I did not know.... I had heard of thee by the hearing of the ear, but now my eye sees thee; therefore I despise myself, and repent in dust and ashes" (42:3-6).

Finite man cannot produce infinite concern. Our oscillating will cannot produce the certainty which belongs to faith. Neither arguments for belief nor the will to believe can create faith. That which is the true ultimate transcends the realm of finite reality infinitely. Faith is not human belief but it is the acceptance of symbols that express our ultimate concern in terms of divine actions. Existence in the poem of Job shows man's existential predicament and the state of being ultimately concerned.